

汐汲の老人

月の光に出汐いでしおや うらさびしくも秋の風
かの貫之も詠じたる 煙絶えにし塩竈しおがまは ふる年波に埋もれ
月のみ昔をしのばるる

青年

浜辺もボタンも見えないが
ちゅうや 中也の歌にあつたのは こんな月夜かもしれない

汐汲の老人

われはこれ 京六条 河原院の汐汲翁に候よ
みなもとのとおるのおとど むかし源融大臣、ここに陸奥塩竈をうつして御遊ぎょゆう
まがき さてもあれなるは籬が島よ

森の梢に鳥の声 舟を寄らして舞楽の宴の

日々、難波津より潮うしおを運ばせ ここなる庭で塩を焼き

煙を愛でる都の秋も 君ましまさばいまむかし今昔

音羽逢坂稲荷山と馴染みし山さえ見当たらず

青年

このときぼくは放つておかれず

山ならば 九段紀尾井の坂を越えて 外苑ごしに不二山が
見えるでしょう？

老人

煙も絶えし不二の山 汐垂る袖は月宿し

池の濁りに月映らじ あら昔恋しや

嘆く涙の波うちて 松風高く吹きゆきて

汐は満ちたり六条の いや陸奥の景色は河原院

融 千賀の浦曲も遠き世に 融大臣あざやかにこそ立ちにけれ

今宵この月の下 面白う汐汲み候え われ遊舞の袖に受く

融 実にまどかなる明月や

青年 たとえば春の初めには

融 かすむ夕べの遠山

青年 まゆずみの色に三日月の

融 影を舟にも例えたり

青年 水に遊ぶ魚には

融 つりばり

青年 雲に飛ぶ鳥には

融 弓の影

青年 それも束の間

融・青年 明けゆけば

融 われは帰らん池中の梢 いでいで共にいざ参れ

青年 あなたの月は水底にあり わたしの月は天にある

思い止まり止まりぬ

名残尽きせじ 白々と 心に入るる月を抱きつ